

日本語「動詞＋てくる」構文の逆行態用法について

清水 啓子

キーワード 逆行態、受動態、直示移動動詞、主観性、文法化

1. はじめに：「来る」の補助動詞への文法化

日本語移動動詞「来る」は、人や物などが話者の領域に向かって移動することを表す直示表現であり、(1)に示すように話者のいる領域に近づく移動では義務的である。この場合に「行く」を使うことは出来ない。

- (1) a. 太郎が(うちに／ここに)来た／*行った。
b. バスが来た。

移動動詞「来る」は、動詞のテ形に後続し「動詞＋てくる」という形式を取り、統語的自立性を失うなどの意味変化を経て文法化し、複合動詞化が進んでいる。この複合動詞形式「Vてくる」は多様な概念領域に意味拡張しており、結果としてその文法的機能は多義である。代表的には以下のような用法を挙げることができる。

(2) <移動方向>

- a. 太郎が走ってきた。
b. 太郎が東京で遊んできた。(坂原 1994:109)

(3) <始動アスペクト>

- a. 空が明るくなってきた。(坂原 1994:110)
b. やがて彼女が好きになってきた。(菊池 2004:40)

(4) <継続アスペクト>

- a. わたしはこの学校の伝統を守ってきた。(菊池 2004:40)
b. これまでもずいぶん努力してきた。(坂原 1994)

(5) <逆行態標識 (inverse marker) >

- a. 太郎が(わたしに)電話をかけてきた／*かけた。

b. トムは私にメリーを紹介してきた。(菊池 2004:41)

ある一つの形態が複数の意味を持つように多義化する場合、その多義的意味の間には何らかの関連性がある。ある一つの形式が表すことのできる複数の概念カテゴリーは家族的類似性によって関連付けられ、またそれぞれの概念構造は相互に何らかの形でプロトタイプと直接的あるいは間接的に関係づけられる。つまり(2)から(5)までのすべての「てくる」は、本来の移動動詞「来る」の意味特徴を何らかの形で継承しているはずである。本稿では、(5)に示した「逆行態標識(inverse marker)」用法の「てくる」構文に焦点を絞って、この用法が移動動詞「来る」の概念構造からどのように派生しているのか、どのような意味側面を継承しているのかを考察する。また逆行態標識としての「てくる」を受動態の「られる」と比較し、その類似点と相違点を明らかにすることによって、逆行態「てくる」の意味的・語用論的特徴の詳細を分析する。理論的枠組みとして、認知文法における主観性(Subjectivity)を援用する。

2. 逆行態 (inverse voice) とは何か

2. 1. 順行態 vs 逆行態

「動詞+てくる」構文が「逆行態(inverse)」を表す文法的要素であると分析した先行研究には、Shibatani(2003, 2006)、Uehara(2005)、古賀(2008)がある。これらの先行研究について論じる前に、逆行態(inverse)とはどのような文法的概念であるかを概観する。

逆行態とは「順行態／逆行態」という対を成す文法的対立のうちの片方で、たとえば 平原クリー語(Plain Cree)では(6)のようにこの文法対立が義務的である(Dahlstrom 1991)。

- (6) a. ni-wa·pam-a·-wa 'I see him'
 1-see-direct-3 (Dahlstrom 1991:36)
- b. ni-wa·pam-ekw-wa 'he sees me'
 1-see-inverse-3 (同書:38)

(6a)と(6b)では主語と目的語の関係が対称的に異なるのにも関わらず語順は同じである。しかし一人称が主語で三人称が目的語の(6a)では順行態(direct)標識(a·)が使われ、三人称が主語で一人称が目的語の(6b)では逆行態(inverse)標識(ekw)が使われている。つまりこの言語においては文法機能(主格や目的格)を語順では示さず、その代わりに主語と目的語の人称情報に基づき順行態と逆行態という対立を明示することによって文法関係を表している。

Payne (1993)は逆行態システム(inverse system)を、事態参加者がもつ本質的話題性の階層(Inherent Topicality Hierarchy)に基づく文法概念と定義する。本質的話題性の階層とは以下のように表される。

(7) 本質的話題性の階層(Inherent topicality hierarchy) :

一人称 > 二人称 > 三人称

逆行態システムを文法体系に持つ言語では、ある事態は 順行態かあるいは逆行態のどちらかとして表現される。順行態／逆行態は、i) 事態参加者の話題性の階層と、ii) 事態展開(あるいは他動性の流れ)の二点をパラメタにして決定される。もし事態参加者が二者あり、それが動作主(Agent)と被動作者(Patient)ならば、その事態は動作主から被動作者へ(Agent → Patient)へと展開することになり、この二者の相対的な話題性が順行態／逆行態を決める。Payne (1993:318)に従うと、もし行為が、一般的に期待される、情動的に自然な方向に進む場合(when the action flows in the normally expected, informally natural direction)、つまり、動作主のほうが被動作者よりも話題性が高いなら、その事態は順行態(direct)で表現される。その反対に、被動作者のほうが動作主よりも話題性が高いか同じ程度の場合には逆行態で表現される。

能動態／受動態の対立において能動態がデフォルトとして特殊な言語形式もなく、無標(unmarked)であり、受動態のみが有標形式をもつ(marked)ように、具体的に順行態／逆行態がどのような言語形式で標示されるかについては、順行態が無標となり逆行態だけが有標である場合もある。以下の(8)は、文法化という観点から、本来のどのような意味をもつ形式が順行態／逆行態を標示する文法機能を持つようになったかという点で興味深い。

(8) a. 順行態(direct) = 'give' (1/2 > 3)

Yamie' chi ta k' pi-'

Girl this NEG scare give-IMPER

'Don't you[PROX] scare this little girl[OBV]!'

b. 逆行態(inverse) = 'come' (2/3 > 1)

a a' ta k' la-'

I OBJ NEG scare come-IMPER

'Don't you[OBV] scare me[PROX]!'

(Givón 2001:165)

(8a)では二人称動作主と三人称被動作者なので順行態で表されているが、それが本来 give の意味を持つ形態素で表示されているのに対し、(8b)では二人称

動作主と一人称被動作者なので逆行態となり、それが本来 come を意味する形態素で表示されている。これは日本語の「てやる」という恩恵授与構文や、本論の主題である「てくる」逆行態構文との概念的並行性を示唆する。

2. 2. 「てくる」構文の逆行態用法

日本語の「てくる」構文がもつ様々な用法の一つに、逆行態を標示する文法的機能があると考えられるのは、以下(9)(10)において、

- (9) a. ??太郎が夜中に(私/うちに)電話をかけた。(順行態)(太郎→私)
 b. 太郎が夜中に(私/うちに)電話をかけてきた。(逆行態)(太郎→私)
 (10) a. わたしは夜中に太郎に電話をかけた。(順行態)(私→太郎)
 b. *わたしは夜中に太郎に電話をかけてきた。(逆行態)(私→太郎)

動作主が三人称(太郎)で、電話をかける相手が一人称(私)である場合は(9b)のように「てくる」形式が必須であり、一方、参与者関係が逆になり、動作主が一人称で、電話の相手が三人称であれば、(10b)のように「てくる」形式は容認されない。

(9a, b)(10a, b)の事例において、「電話をかける」という行為を「抽象的な移動」と捉え、具体的移動の拡張例と考えて、「てくる」を逆行態標識としてではなく、「主体位置変化動詞」として分析する研究もある(山田 2004)¹⁾。もちろん(9b)の「てくる」は元もと移動動詞である「来る」が補助動詞に文法化した形式なので、移動という概念に何らかの関連はあるのだが、移動という意味フレームから逸脱する概念内容に注目して、逆行態標示と捉えなおして、類型論的に検証されている逆行態(inverse)という文法的概念構造の観点から「てくる」をめぐる現象を観察することによって、「来る」の文法化プロセスの中に、人間言語の普遍性および日本語の類型的特点をみいだすことの意義は大きい。本来的に「来る」が直示移動動詞であることから、主体移動や対象移動といった移動概念と逆行態用法の間に意味・概念上の連鎖や解釈の曖昧性が存在することは予想されることであり、かつ文法化という歴史的過程の大枠から見れば当然期待されることでもある(Hopper and Traugott 1993 など)。

3. 直示移動動詞「来る」の意味構造

逆行態用法の「てくる」構文の詳細な分析に入る前に、本動詞である「来る」の概念構造について、特に逆行態用法への意味拡張・文法化を考察するにあたって重要と思われる概念特性について概観する。

3. 1. 直示性

多義的に意味拡張した「てくる」のすべての用法において重要な役割を果たして

いるのが、「来る」の直示性(deixis)である。直示性とは、発話場面(話者、聞き手、発話の場所と時間)に直接関係づけられた概念で、英語では人称代名詞(I, you, me)、時制、場所や時間を表す副詞(here, now)などが該当する。移動動詞「来る」や‘come’は、話者の領域に近づくことを表すとき、その使用が義務的である。

「来る」や‘come’と対称的ペアをなす移動動詞に「行く」や‘go’がある。日本語の「行く」と「来る」および英語の‘go’と‘come’を直示性の観点から比較してみると、それぞれが対称的ではないことがわかる。以下(11)から(12)の例文から明らかなように、英語の‘go’や日本語の「行く」が非直示的な移動を表すことができるのに対し、(13)から(14)のように‘come’や「来る」は直示性を保持し、非直示的には使用できない²⁾。

“GO”と「行く」

- (11) a. I went to school. (直示的)
 b. Ben went to school. (非直示的)
 (12) a. (わたしは)学校へ行った。(直示的)
 b. ベンは学校へ行った。(非直示的)

“COME”と「来る」

- (13) a. Ben came (to my home). (直示的)
 b. ??Ben came to Tom’s home. (非直示的) (話者がTomの視点を取らない場合)
 (14) a. ベンが(うちに)来た。(直示的)
 b. ??ベンがトムのうちに来た。(非直示的) (話者がトムの視点を取らない場合)

「来る」の直示性は、「てくる」の逆行態標示への意味変化に深く影響している。次節ではこの「来る」の直示性という概念特性を認知文法の主観性(subjectivity)という観点から捉えなおし、移動動詞「来る」の概念的プロトタイプを提案する。

3. 2. 主観性(Subjectivity)

認知文法(Langacker 1985, 1990, 1991など)においては、すべての言語表現は言語主体(概念化者)の主観的な解釈を反映していて、言語表現の意味とは言語主体の概念化内容であるとみなされる。話者(概念化者)は概念化する主体(subject of conceptualization)であり、概念化される対象(object of conceptualization)とは区別される。といっても、概念化主体自身が概念化の対象となることはごく普通であり(話者が自分自身の経験を語るというのは言語活動の最たるものであろうから)、そのような場合には「私(I)、あなた(you)、私を(me)」といった直示的人称代名詞が使われる。しかし、直示表現を全く使っていないのに

主体の関与を表す場合がある。

- (15) a. Vanessa is sitting across the table from me.
 b. Vanessa is sitting across the table. (Langacker 1990)

(15a)と(15b)の違いは、話者の事態関与が明示的に言語化されているか非明示的であるかという差にある。(15a)では話者が代名詞(me)で言語化され、つまり「自己を客体化」して概念化対象の中にほうりこんでいるので、話者は概念化主体という役割とは別途に、概念化対象というもう一つの役割を客観的な言語形式によって与えられている。これは事態の見方、概念化のし方と言う観点からは Vanessa is sitting across the table from Veronica. という言語主体が事態に登場しない客観的な描写と同じであり、ただ Veronica という第三者を me に置き換えたにすぎない。一方(15b)では、(15a)と同様に言語主体(話者)が Vanessa の位置を特定するための参照点になっているにも関わらず、言語表現を与えられていない。この場合の言語主体は、概念化される対象に客観的には含まれていない。なぜならば(15b)は、言語主体がその現場で自身の立ち位置から見える知覚内容を概念化・言語化しているからである。人は知覚行為において必然的に、知覚の対象となる物事に集中する。その結果、知覚する主体としての自身の身体や意識は背景化され、まるで存在しないか不要であるかのように扱われる(Gibbs 2005, Leder 1990)³⁾。このことは、以下(16a,b)の対比から明らかである。

- (16) Look at this photograph!
 a. Ed Klima is sitting across the table from me!
 b. *Ed Klima is sitting across the table! (Langacker 1985:141)

自分自身が写っている写真をみて(16a)と言うことはできる。言語主体である話者と写真の中に写っている話者は発話時には別個に存在するので、写真の中の自分自身を me と客体視して言うことができる。一方(16b)は言語主体である話者が発話時にその現場で参照点として機能している状況を表して、言語主体と参照点である自分自身は同時刻に同じ空間を共有する同一存在である。話者はあくまで言語主体として把握され、客体視されていないので、写真の中の自分を指すことはできない。

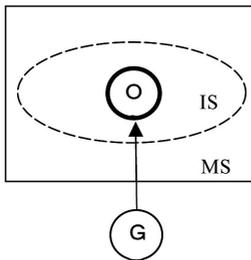
表現の「客観性 \leftrightarrow 主観性」というパラメタを、言語化される対象(概念化される客体)と言語主体(概念化する主体)との関係とすれば、言語表現が持ちうる主観性(Subjectivity)は以下の I から III の段階に分類できる。I から III にゆくに従い表現内容の主観性の度合いは高くなる。

- I. 客観的表現: Vanessa is sitting across the table from Veronica.
 II. 言語主体の客体化: Vanessa is sitting across the table from me. (=16a)
 III. 主観的表現: Vanessa is sitting across the table. (=16b)

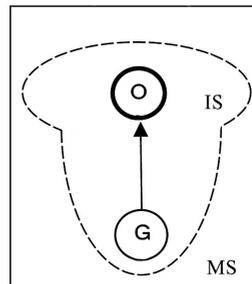
概念化主体はその状況を認知する主体でもあり、普通は認知・知覚される対象内容の中には含まれない。したがって明示的言語形式で客体化されない(I)。しかし言語主体が事態に関与する場合もあり、言語主体が客体として言語形式に現われていれば、その表現は I よりも主観性を帯びるが、言語主体は自らを客体視しているため表現内容は客観性を残す(II)。主観性が最大限に高いのは、事態に言語主体が直接的に関与し、さらに概念化される(見える)状況を現場的な現象のままに表した表現であり、言語主体自体は言語形式を与えられていない(III)。Langackerは(I)を最適視点配置(optimal viewing arrangement)とよび、(III)を自己中心的視点配置(egocentric viewing arrangement)とよぶ。以下<図1>に I と III を示す。I では言語主体(G)が表現内容に含まれないので“off-stage”にあるとされ、III ではGが言語化されていないが表現の概念内容に含まれているので“on-stage”にある。次節で、「てくる」逆行態の概念構造は III に近いということを提案する。

<図1>

最適視点配置 (I)
(optimal viewing arrangement)



自己中心的視点配置 (III)
(egocentric viewing arrangement)



O: 概念化対象 (Object of conceptualization)

G: 概念化主体、グラウンド

IS: 直接スコープ

MS: 最大スコープ

→: 概念化作用

2. 3. 「来る」の主観性

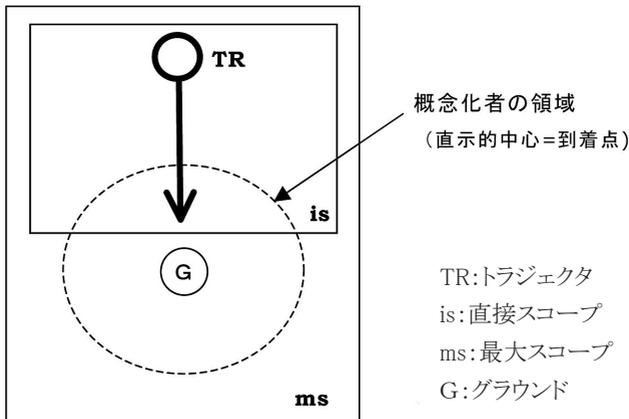
(17)のような「来る」や‘come’を含む表現は、どのような主観性あるいは客観性を持つのであろうか。

- (17) a. バスが来た！
b. The bus is coming!

(16b)の概念化対象に話者が主観的ではあるが含まれる(on-stage)のと同様に、(17a, b)においてもバスの移動の方向は話者を参照点として決まり、概念化される対象は現場での話者の「見え」という知覚内容である。その点から(17a, b)はたとえば「バスが到着した」よりも主観性の高い表現であるといえる。

「来る」の用法分析をした先行研究の多くが、この動詞の直示性あるいは主観性という特性を的確に捉えていない。「行く」と意味的に対立するその直示性を説明するために様々に図示されているが、その多くが概念化者である主体を「客体視」し、図中に客観的な人物として登場させてしまっているという問題がある(松中2005:240、坂原1994など)。そうではなく、概念化主体である話者からの「見え」という主体の視点を保持した「来る」のプロトタイプを図示する必要があり、それは以下<図2>のように表すことができる(Uehara 2006、本多1995なども参照⁴⁾)。

<図2> 「来る」のプロトタイプ



移動という概念には起点 (Source)、経路 (Path)、到着点 (Goal) が基本的構成要素として含まれるが、「行く」と異なり「来る」では起点は背景化され、到着点が前景化されており、かつその到着点は話者の領域である (坂原1994:112)。「来る」のプロトタイプ的な概念構造<図2>に、「バスが来た」という具体例をあてはめると、トラジェクタ (TR) が移動してくる到着点 (goal) は、話者 (概念化者 = グラウンド (G)) の領域であるが、言語表現自体には話者が客体化されていないので、G は言語表現の直接スコープ (on-stage) には含まれていない。しかし G は到着点の参照点として重要な概念的役割を果たしているので最大スコープ (ms) 内に存在する。このグラウンドの言語的に非明示な役割を、前節の主観性の3段階に位置づけるなら、最も主観性の高いレベル III と見なしてよいと考える。なぜならば話者が参与者として機能しているわけではないが、「来る」にとって重要な到着点の直示性という意味に概念的貢献をしているのであるから、G (概念化主体) をモノミー的に空間概念に意味拡張して、前節<図1>の III の拡張的事例とみなすことができる (異なる提案については Uehara 2006 を参照)。G を参照点として決まる到着点の具体的な範囲は、その発話状況によって決定される。バスを待っている人にとってはバスの車体前方がはるかに先の視界に入ってきたと認知した時点で「バスが来た」と言え、厳密に話者の立つバス停まで来て停止していなくてもかまわない。<図2>に示したような「来る」のプロトタイプがその意味に概念化主体を含むという主観性の高さ、つまり移動の到着点が言語主体の領域であることが、「てくる」構文の逆行態用法への変化において極めて重要な役割を果たしている。

4. 逆行態用法への文法化連鎖

本節では、「来る」の移動動詞用法から、どの様に「てくる」逆行態用法へと意味が拡張するかを考察する。意味拡張や文法化現象においては、複数の文法機能や意味が別個に孤立して存在するのではなく、異なる意味クラスター間で曖昧な用例が橋渡しをし、文法化連鎖や多義ネットワークを構成していると考えられる。「てくる」の逆行態用法の場合は、「動詞+てくる」の二つの異なる用法が逆行態機能へと収斂していると思われる。

4. 1. 物の移動から、伝達行為の方向性へ

まず (18) のような継起の「動詞+て、来る」からの文法化連鎖を考察する。

(18) 太郎が梨を買って、うちに来た。

(19) 太郎が (私に) 梨を買ってきた。 (*私に梨を買って][きた])

(20) 太郎が (私に) 手紙を送ってきた。

(21) 太郎が (私に) 電話をしてきた。

(22) 太郎が (??私に) 申し出を無視してきた。

(23) 太郎は(*わたしに)そこにふを打ってきた。(Matusumoto 1996:238、一部変更)

(18)の「くる」は本来の移動動詞として使われているが、(19)では先行動詞との意味的融合が強くなり、動作主と物両方の移動方向を表すようになる。(20)では動作主自身は移動せず、物だけが移動し、その方向性を表す。(21)は伝達行為の方向性を表す。物の移動(20)からメッセージの移動(21)への拡張の背後には導管メタファー(Reddy 1979)が働いていると考えられる。(22)ではメッセージの伝達はないが、返事をするという期待される行為をせず「無視する」つまり「太郎が返事をしてこない」という方向性が概念構造に含まれる。(23)は将棋の場面で、相手がコマを打つという行為には、コマの移動があるが、二格ですでに到着点が明示されているので、「わたしに」という方向性は明示できない。(22)(23)では、具体的な物の移動が背景化されて、動作主の行為全体が前景化し、これらの「てくる」は行為が話者に向けられていることを表す逆行態プロパーに近い機能を持つようになっている。

4. 2. 動作主の身体移動から、行為の方向性へ

次に(24)のような同時性を表す「動詞＋て来る」の用法から逆行態へ至る文法化連鎖を考察する。

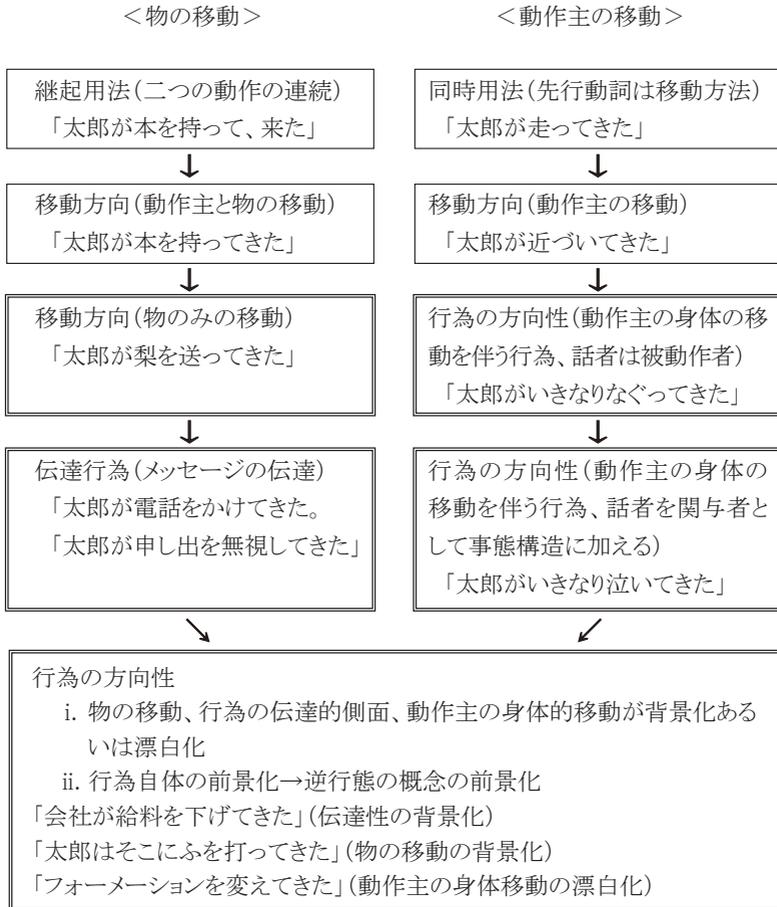
- (24) 太郎が走って来た／走って行った。
 (25) a. 太郎が近づいてきた／近づいて行った。
 b. 京都が近づいてきた／*近づいていった。
 (26) a. 太郎がぶつかってきた／ぶつかっていった。
 b. バイクで走っていると、虫がぶつかってくる。(Google 検索)
 (27) a. 太郎が(いきなり)なぐってきた。
 (cf: *(わたしは) (いきなり) 太郎をなぐっていった。)
 b. 太郎が(いきなり)キスしてきた。
 (28) フォーマーションを変えてきた。(Google 検索)
 (29) 不況で、親会社が工賃を値切ってきた。(坂原 1995)

まず(24)は「走る」が移動の様態を表し、主語指示対象が「走る」の動作主で、「て来る」は移動の方向性を示す。(25)の「近づく」は移動様態ではなく参照点との距離の変化から移動を表す動詞であり、この「てくる」は(24)と同様に直示的中心を到着点とする移動の方向性を示している。(26)の「ぶつかる」は接触を表し、この場合の動作主の行為は意図的でなくてもよい。(26b)はバイクを飛ばしている

と虫があたる、ということを書いており、相対的により高速で移動しているのは虫ではなく話者の方である。(25)(26)は、主語指示対象と話者(直示的中心)の相対的な位置関係や二者の接触事態を表す動詞が「てくる」に先行するため、主語指示対象は動作主でなくてもよい(25b、26b)。このように主語指示対象を動詞が表す行為の動作主とは解釈できない(つまり相対的に実際に動いているのは話者である)場合は、逆行態用法への連鎖関係がなくなる。なぜならば、(26a)から(27)の逆行態への用法拡張は、主語指示対象が動作主である場合にのみ可能だからである(主語指示対象が動作主とは解釈できないような無意志的動詞が「てくる」に接続する場合は始動アスペクトへの文法化連鎖が認められるが、この点については後述する)。(27)は主語の意図的行為であり、かつ自身の身体全体(あるいは身体の一部、腕や顔など)を話者の方へ移動させなければならない行為であり、この事態の中には動作主の話者への物理的移動が概念的にまだ含まれている。しかし(24)の「走ってきた」や(26)の「ぶつかってきた」と異なるのは、移動方向を「ていく」にかえて「なぐっていった」とは言い換えられないことである。つまり(27)では、先行する動詞の概念内容に「移動」の意味が薄いため、(24)(26)の「てくる」にはあった「移動」という概念が背景化し、ほとんど漂白化されて消えており、その結果、行為自体に焦点が移り、「行為が話者に向けられている」という逆行態に典型的な概念が前景化している、と考えられる。さらに(28)ではおそらく主語指示対象の個々の選手は様々な移動をしているとは言え、チーム全体として一方向に移動しているわけではなく、「移動」という概念は無い。さらに「フォーメーションを変える」という事態に話者(たち)が直接関与しているわけではないので、この「てくる」は主観性の非常に高い逆行態である(前節の主観性レベルではIIIに該当)。(28)の発話は、対戦相手側のサッカー選手やコーチが話しているのではなく、サッカーの実況中継をしている解説者の発話であってもよい。解説者が、だれ(どちらのチーム)に共感(Empathy)を置くかは、個々の発話のたびに自由にかえることができる。(28)のスポーツ場面にくらべると(29)は現場性に向け、主語指示対象者の行為も身体的行為ではなくなり、動作がない。「工賃を値切る」という述部に話者(たち)が直接参与者として含まれてはおらず、話者を事態場面に主観的に読み込むという点では(28)と共通している。(29)では身体的な動作がない分だけさらに、動作主の社会的な行為が話者(たち)へ向けられたものであるという言語主体の事態に対する捉え方、事態の見え方を表す機能が前景化されている。上記(24)から(29)までの例((25b)と(26b)を除く)では、主語指示対象の動作主性を共通項としているが、当該行為がどれほど「移動」ではなく「行為」と捉えられるかによって、逆行態用法へのカテゴリー変化が認められる。(27)はその行為性の高さゆえに、逆行態用法と考えて良いのだろう。当然(28)や(29)は逆行態プロトタイプに近づく。

以上4.1節と4.2節で述べた「てくる」の逆行態用法をめぐる周辺的な用法の連鎖関係は、以下のように図示することができる。

<図3> 「てくる」逆行態をめぐる構文ネットワーク
(二重線枠：逆行態とみなせる用法)



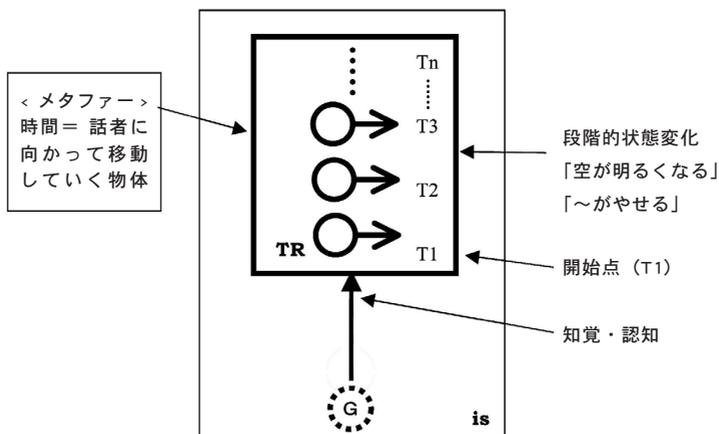
4. 3. 始動アスペクトとの接点

坂原(1994)は「てくる」の始動アスペクトを表す用法について論じるなかで、その二つの意味制約のうちの一つとして「話し手の感情」をあげている。

- (30) a. 太郎はだんだん私を見放して来た。
 b. *私は、だんだん太郎を見放して来た。

坂原によれば、話し手は感情の起点であり、共感視点は自分自身に有るので、感情は自分から離れていく移動物とみなされる。一方「来る」を使った(30b)では、話者自身の感情変化の事態を、未来にある変化事態の終止点から逆方向に見るように強制するので、事態を捉える話者の視点が首尾一貫せず、従って(30b)は不自然となる、と説明される。しかし「てくる」の始動アスペクトの意味は、ある段階的状态変化の「開始」を話者が「知覚」することを表しているところに発生する。おそらく「時間＝話者へと移動してくるもの」という時間に対するメタファー的概念化が作用していると考えられる。始動アスペクト用法の「てくる」は以下<図4>のように表すことができる。

<図4> 始動アスペクトの「てくる」



ここで重要な要因は、概念化者がその変化を「知覚」することにある。<図4>では、概念化者と時間との配置を、時間や出来事が概念化者の正面にむかって移動してくるもののように配置してある。概念化者がある事態を(視覚的に)知覚できるということはその事態が発生していることを意味し、その変化が時間的な幅のある段階的状态変化であれば「てくる」が開始点の標識となる。この始動アスペクトの意味が前景化されるために重要なのは、話者がその変化を「意志に関わらない外的な状況変化」として現象的に知覚することにある。したがって(31a)では、話者自身の身体的変化ではあるが、意志をもってコントロールしている変化ではないので、

その変化の気づきという「知覚」によって、状態変化の開始を「てくる」で表すことができる。

- (31) a. (わたしは)このごろだんだん痩せてきた。
 b. 空がだんだん明るくなってきた。

(30b)では動作主が話者でありかつ「見放す」というみずからの意志的な行為を、自己の外部に生じる現象という知覚対象として捉えて言語化しているため不自然なのである。つまり、話者が動作主で意志的な行為の場合は始動アスペクトを表すことはできないといえる。このことは(30)の述部が「見放す」であるためであり、これを坂原は「感情表現」としているが、「見放す」には具体的な行為性がある。何らかの具体的な行為の実現(あるいは期待される行為の非実現)によって「見放す」という行為がおこなわれたと判断するのであって、「好きだ」のような感情表現とは異なる。「見放す」は具体的な行為性が高いということは他動性も高く、したがって動作主から被動作者への行為の方向性が認められる。(30a)が容認されるのは、動作主から被動作者への行為の方向性が三人称(太郎)から一人称(話者)に向かっているためである。一方(30b)が容認されないのは、この他動性の方向が一人称(話者)から三人称(太郎)に向かっているためであり、話者自身の「見放す」という意志的行為の開始を、あたかも話者自身が気づいていない外部情報として「知覚」するような表現になってしまうためである。(30)の「てくる」は始動アスペクト用法であるのにこうした人称制限がかかっているのだが、この人称制限は「てくる」の逆行態用法と共通するものである。したがって(30a)は始動アスペクトと逆行態標示の両方の性質を持っている、文法化連鎖の分岐点のような事例といえる⁵⁾。

行為性が低い、つまり他動性の低い心理状態を表す述部であれば、このような人称制限が消滅し、純粋な始動アスペクト標示となる。以下(32)の「あきる」という動詞は意図的行為ではなく、心理的な状態変化を表し、「二格」で示される指示対象は心理が生じる対象で、行為の影響をうける被動作者ではなく、したがって他動性という方向性が極めて低い。(32a)は太郎の心理変化の開始を前景化して始動アスペクトに解釈することができる。(32b)も、一人称主語と三人称「二格」であっても「てくる」が使えるが、この場合の「てくる」は始動アスペクト標示としての解釈しかできない。もしこれを逆行態標示として解釈するならば、(32c)のように他動性の人称制限が働いて容認されないはずである。

- (32) a. 太郎はだんだん私にあきてきた。(3人称→1人称)

「始動アスペクト」

- b. 私はだんだん太郎にあきてきた。(1人称→3人称)

「始動アスペクト」

c. *私は太郎に電話をしてきた。(1人称→3人称) 「逆行態」

「てくる」が純粹な「始動アスペクト」用法になっていれば、(32a,b)のように人称制限はかからない。先の(30b)が容認されないのはこの「てくる」が行為の方向性を示す「逆行態標式」の意味も持つためである。

「てくる」始動アスペクト用法と逆行態用法に共通するのは、概念化者による知覚である。前者は段階的状態変化の開始の知覚であり(移動つまり段階的位置変化からの拡張)、後者の逆行態用法は、話者に向けられた行為に対する被動作者(あるいは影響を受ける参与者、受益者や被害者など)としての立場からの知覚である。双方ともに本来の移動動詞「来る」が持つプロトタイプ的な概念構造、つまり概念化者の領域へのトラジェクタの移動を概念化者が知覚するという知覚行為に発するものである。

5. 逆行態と受動態

5. 1. ヴォイス現象としての逆行態

Givón (2001)も Shibatani (2006)も、類型論的な観点から逆行態をヴォイス現象のひとつとみなしている。まずはGivónの見解を概観する。

5. 1. 1. Givón (2001)

Givónは「逆行態とはヴォイス現象であり、非他動化ヴォイス(de-transitive voice)で、その機能は語用論的なものである」と分析し、「非他動化ヴォイスの語用論的特徴は、意味的には同一構造を持つ他動的事態を異なる語用論的視点から捉えることにある」という。ここでいう異なる語用論的視点とは「動作主と被動作者のあいだの相対的な話題性(the relative topicality of the agent and patient)」を指す。そして、能動態/受動態、順行態/逆行態の4つのヴォイス構造を、動作主と被動作者の話題性という観点から以下のように特徴づけている(Givón 2001:93、日本語訳:筆者)。

(33) 能動態(順行態)	動作主 > 被動作者
逆行態	動作主 < 被動作者
受動態	(動作主) << 被動作者
逆受動態	動作主 >> (被動作者)

————— :より話題性が高い

() :省略可能

Givónに従うと、能動態(=順行態)がもつとも中立的で無標である。動作主と被動作者ともに話題性があるが、相対的には動作主により高い話題性を与える。一

方逆行態では被動作者の話題性のほうが動作主よりも高い。

ここで逆行態と受動態に注目してみると、Givonは両構文において動作主より被動作者のほうが話題性が高いと分析しているのだが、受動態と逆行態の違いは、逆行態よりも受動態のほうが被動作者の話題性が高いことにある。ここから自然と結論されるのは、「被動作者の話題性の程度」という一つのパラメタで受動態と逆行態という二つの異なる文法カテゴリーに分けられるのであるなら、この二者は相互排他的 (mutually exclusive) なはずであり、結果として受動態と逆行態は一つの述部の中に共起できないと予想される。しかしこの予測に反して、日本語においては以下(36)のように受動態「られる」と逆行態「てくる」が共起できる。「おしてくる」という逆行態が「おしてこられる」と受動化されている。

- (34) a. 満員電車で後ろの高校生がおもいきりおしてきて、死にそうだった。
(逆行態のみ)
b. 満員電車で後ろの高校生におもいきりおしてこられて、死にそうだった。
(逆行態+受動態)

(34b)が強く示唆するのは、日本語の「てくる」逆行態構文と「られる」受動態構文は、動作主と被動作者の話題性という単一のパラメタ(の相対的な値の違い)に集約されるヴォイス対立ではなく、事態の捉え方・概念化の仕方においてそれぞれの特徴を持つものとみなすべきである、ということである。そして二構文の概念構造は(34b)のように、両者を一つの述部に統合しても意味的な不整合が生じないことも説明できなくてはならない。^{6) 7)} 広く言語類型論的な包括的観点から分析したGivónのような一般化は学問的価値もある一方、逆行態という文法カテゴリーがどのような過程を辿って言語の中に発生してくるのかという機能的・動的な文法観に立てば、日本語「てくる」の逆行態用法の言語的事実を正確に反映するような記述および説明が不可欠である。

5. 1. 2. Shibatani (2003, 2006)

日本語の「てくる」が逆行態というヴォイスを標示する機能を持つことを指摘したのはShibatani(2003)である。さらにShibatani(2006)は、能動態／受動態と順行態／逆行態の対立を以下(35)のように説明している。

- (35) “...the active/passive and direct/inverse systems divide the task of indicating the direction of an action with regard to the deictic center. When simple actions are involved, the active/passive opposition is utilized. When an action involves the transfer of some entity...the

direct/inverse pattern is invoked”.

(能動態／受動態と順行態／逆行態に二対立は、直示的中心という観点からみた行為の方向性を示す機能を、二つに役割分担して受け持っている。単純な行為(simple actions)が関与する場合は、能動態／受動態のヴォイス対立が使われ、行為に何らかの物体の移動(the transfer of some entity)が関わる場合は、順行態／逆行態パターンが用いられる。)

(Shibatani 2006:250、日本語訳：筆者)

受動態と逆行態の選択を直示的中心という概念から特徴づけていることが、Givónとの違いであり、日本語の言語現象を的確に捉えているといえるのだが、(35)の後半の説明にはいくつかの疑問が生じる。つまり、1)受動態になるような「単純な行為(simple actions)」とは何か、2)「何らかの物体の移動(transfer of some entity)」が関与する行為だけが逆行態になるという定義は記述的に妥当か、という2点である(古賀2008も参照)。まず一番目の疑問を考察するために、受動態と逆行態を比較し、両者の差異を明確にする。二番目の疑問についてはすでに4節で反例があがっているのだが、さらに明確にするために、「てくる」構文の概念構造の詳細を分析し、その概念上・語用論上の制約を考察する。

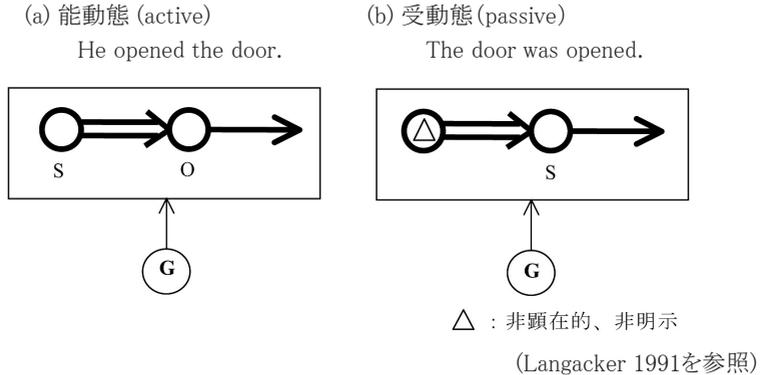
5. 2. 「てくる」逆行態構文と「られる」受動態構文の比較

5. 2. 1. 能動態／受動態システム

以下の<図5>は、認知文法による能動態・受動態の概念構造である。能動態にせよ受動態にせよ、言語主体であるグラウンド(G)は概念化される対象(プロファイル)の中に含まれていない(図中では細線で標示)。つまり以下の関係が成立する。

- (36) 概念化主体の話者：最大限に主観的(maximally subjective)な存在
概念化される状況：最大限に客観的(maximally objective)な存在

< 図 5 > 能動態と受動態の事態構造



Langacker (1991)は受動態の特徴について、以下のように述べている。

- (37) The markedness of a passive or passive-like construction does not derive from profiling (indeed, a passive is most felicitous when it designates a canonical event). Rather, it resides in the fact that the participant otherwise expected to be the subject is bypassed in favor of a less qualified candidate.

(受動態あるいは受動態に類似した構文の有標性は、それが表す内容に発するのではなく(実際、最も基本的な事態を表す場合の受動態文が一番受け入れられやすい)、むしろ、本当であれば主語とされる参加者を無視して、本来なら主語になる資格の低い参加者を主語にするという事実にある)
(Langacker 1991:335、日本語訳:筆者)

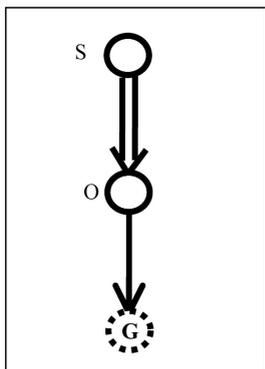
この受動態に対する特徴に従えば、受動態は普通なら能動態で表される事態において、何らかの理由・動機づけによって動作主がそれほど概念的に際立っておらず、被動作者あるいは他の非動作主参加者の方により高い概念的際立ちが与えられることが、その主語としての言語化を容認する。こうした概念的際立ちという観点から能動態／受動態の対立を動機づけるとすれば、話者(概念化主体あるいはグラウンド)がその事態に参加者として関与しているかどうかはとりえず不問とされ、Gは概念化対象の外におかれ最大限に主観的な存在として発話行為に関係している。Langackerの受動態のスキーマは、3節でみた最適視点配置を取っており、主観性という要因は受動態構文選択には無関係である。

5. 2. 2. 「てくる」逆行態の事態構造

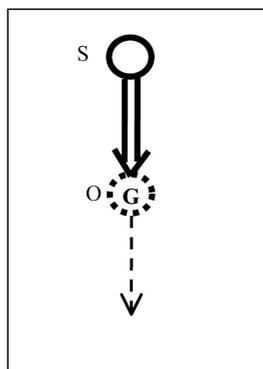
次に日本語「てくる」逆行構文を考察する。この構文の概念構造は、移動動詞「来る」のプロトタイプのスキーマ(図2)の直示性を継承している。この点を重視して「てくる」構文の概念構造を図示するならば、<図6>のように表すことができる。ここでは、他動性の方向を話者(概念化者)から独立させて横に平行的に描くのではなく、話者に向かう他動性の流れとして垂直方向に描いている。これは「てくる」構文において、事態に対して客観的な視点(「最適視点配置(optimal viewing arrangement)」)ではなく、概念化者を事態に巻き込んだ主観的な視点、つまり「自己中心的視点(egocentric viewing arrangement)」を取ることをスキーマ上に明示するためである(Langacker 1990を参照)。

<図6> 「てくる」逆行態構文

(a) 話者へ物が移動する場合



(b) 話者へ向けられた行為



(38) a. 太郎が(わたしに)手紙を書いてきた。

b. 太郎が(いきなり)(僕を)なぐってきた。

(古賀2008:245)

Shibatani (2006) に反して、「てくる」逆行構文は物が移動しない事態も表現することできる(古賀 2008など)。したがって上記のように、(a)物が話者へ移動する事態と、(b)行為が話者に向けられる場合の二つの下位事態タイプに分けて図示した。まず<図6(a)>のように実際に物が移動する例(38a)では、物の移動が概念化者(G)に向けられている。Gが点線なのは、言語主体(G)が言語表現に明示されなくてもよいことを反映している。

文法機能からみると、動作主は主語のままであり、能動態と同じである。しかし、

逆行態構文の場合、二格名詞句(到着点)が話者であり、言語主体の「意識の在り処」としてその視座から事態の展開を見ている。この視座は動作主への注視(概念化)よりも先行して存在する。日本語は英語のように言語主体自身を客体化せずに、その視座からの「見え」をそのままに言語化する構文形式が多く、「てくる」逆行態構文もその一つといえる(Ikegami 2006など)。

次に、物の移動が関与しない事態の例として(38b)を考察してみる。この「太郎が話者をなぐる」という行為は、動作主(太郎)と被動作者(話者)の身体的接触があつて初めて成立する。この場合、話者は移動せずとも、動作主(太郎)の方は自身の身体全体を話者に向けて移動させるとともに「なぐる」という行為を実現する。「なぐる」ためには話者に向けての動作主の身体移動が前提とされるので(38b)の例では、まだ「移動」という概念は背景化されてはいるが残存する。動作主の行為に物理的な移動が含まれないような例は4.2節で考察したとおりだが((28)(29)など)、それらも<図6(b)>にあてはまる。

5.2.3. 逆行態と受動態の概念的差異

ここで問題となるのは、受動態と逆行態では意味的・概念的の差異があるのか、あるとすればどのような差異か、という点である。前述した Shibatani(2006)の受動態と逆行態の役割分担(行為か、物の移動か)という分析が妥当ではないことはすでに確認したが、この二構文の間にはやはり何らかの概念的差異が存在することを以下(39)の対比から考察してみる(古賀2008も参照)。

- (39) a. いきなり太郎になぐられた。(受動態)
 b. いきなり太郎がなぐってきた。(逆行態)

(39a、b)の意味の違いは、以下(40)のように後続節を加えることでより明らかになる。

- (40) a. *いきなり太郎になぐられたけれど、うまくかわした。
 b. いきなり太郎がなぐってきたけれど、うまくかわした。

受動態(40a)では結果として「なぐる」行為が成立しているので、「かわした」ということで行為をキャンセルできない。受動態は行為が成功裏に行われたことまでを意味に含む。一方、逆行態(40b)は「なぐる」という行為の結果までは含まず、行為プロセス、言い換えると動作主による行為の途中経過に焦点があり、行為が結果状態を引き起こすに至ったかどうかは不問である。この二構文における焦点の違いは、事態の主語選択に大きな影響を及ぼす。受動態では典型的には、行為の結

果として生じる被動作者の状態変化や影響に焦点がある。とすれば、そうした状態変化事態の主語は当然、被動作者となつてしかるべきである。一方「てくる」逆行態が、行為の達成およびその結果に焦点があるのではなく、行為がおこなわれるというそのプロセス自体に焦点があるとすれば、そうした行為事態の概念化では、典型的には行為開始の要因となる動作主から行為連鎖(action chain)が始まるのが自然である⁸⁾。つまり、受動態と逆行態の主語選択の違い(被動作者か動作主か)は、この二構文がそれぞれに前景化し焦点化する行為連鎖部分の違いと深く関係している。

以上をまとめると、受動態と逆行態は次のような概念化上の焦点の違いがあるといえる。

(41) 受動態: 話者に対して行われた行為の結果に焦点がある

⇒ 被動作者(話者)の状態変化に焦点があるので、被動作者を主語にする。

逆行態: 話者にむけられた行為のプロセスに焦点がある

⇒ 行為プロセスの実現には動作主がその始動要因として存在しなければならないので、動作主が主語役割を担う。

さらに(39a)と(39b)の差異は<図7>のように図示することができる。

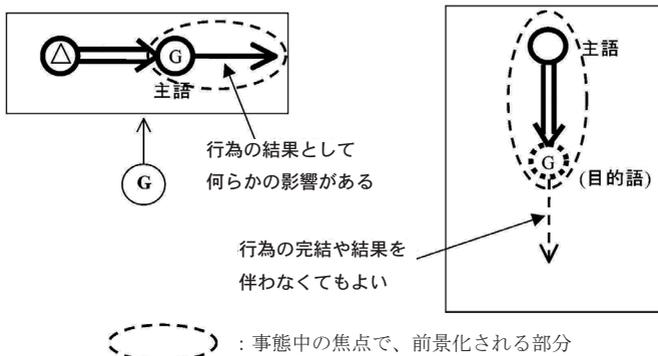
<図7> 受動態と逆行態の比較

(a) 受動態

「(私は) 太郎になぐられた」

(b) 逆行態

「太郎が(私を) なぐってきた」



受動態(a)では主語である被動作者が結果として何らかの状態変化を受けることを実線矢印で示し、逆行態(b)では行為が成功せず未遂におわり被動作者である話者に結果として何らの影響も生じなくてもよいことを点線矢印で示した。この受動態と逆行態における行為の焦点の違い、つまり前景化されるのは行為完結とその結果か、それとも行為プロセスかは以下(42)でさらに明確になる。

- (42)a. 自転車が泥棒に盗まれた。(受動態)
 b. *泥棒が自転車を盗んできた。(逆行態)
 (「泥棒が自転車を盗んで、それを持って来た」という解釈ではない)

(42a)と(42b)の容認度の違いは受動態と逆行態の焦点の違いから説明できる。「盗む」という行為が成功裏に行われれば結果として話者は被害をこうむったことになり、この被害をうけたという点を前景化する受動態(a)は相応しいが、実際に何か盗まれてその結果として被害を受けたのに、その被害を後景化し、行為のプロセスだけを前景化することは不自然であるし、あるいはまた「盗む」という行為が未遂に終わったのであれば、話者はその未遂の行為プロセスを「盗む」行為であると特定するのは実際問題として難しいだろう。仮に特定できたとしても「盗もうとした」というのが普通で、「盗む」は本来、結果状態に焦点がある達成タイプの動詞といえる⁹⁾。

6. 逆行態の持つその他の概念的特徴・制約

6. 1. 知覚可能性

坂原(1995:110)は、「てくる」逆行態には「恩恵(benefactive)」事態や「受害(malefactive)」事態を表す機能もあるとし、次の(43)をあげている。

- (43) 不況で、親会社が工賃を値切ってきた。(坂原1995:110)

しかし、以下(44)のように動作主の行為によって話者が心理的に否定的な影響をうけるような心理述語動詞(うらむ、にくむ)の場合、受害性がありそうなのに、(44b)のように「てくる」は容認されず、受動態のほうが適切となる。これはなぜなのだろうか。

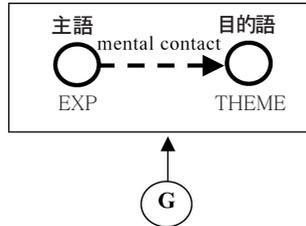
- (44)a. 太郎にうらまれた／にくまれた。
 b. *太郎がうらんできた／にくんできた。

(44)のような心理述語動詞の文では、主語が心理状態を抱く人間、目的語が心理状態を抱く対象である(太郎が私をうらむ／にくむ)。その主語と目的語の非対

称的な関係は抽象的であり、具体的な行為がなされるわけではなく、他動性は極めて低い。以下<図8(a)>のように主語(心理状態の経験者)は対象に対して単に一方的に心的注意(mental contact)を向けているだけで物理的な他動性はない。したがって目的語である、心理状態の原因となる対象はこの心理注意(mental attention)によって影響を受けるわけではない。対象はこの主語が抱く感情に気づく必要性はない。むしろもし目的語指示対象(=話者)が自分が「うらむ」や「にくむ」の対象になっていると気づいているならば、それは主語指示対象者が向ける心的注意(感情)だけではなく、主語が話者に対して何らかの具体的な行為を実行して、その結果、話者は自分が「うらむ」や「にくむ」の対象になっていることに「気づいている」のが普通である。たとえば、悪口を言われるとか、無視されるなど、具体的な行為を通して「うらみ」の対象になっていると気づく。話者が「何かをされた」と感じて「うらみの対象になった」と解釈する時すでに、話者は心理的に影響をうけている。つまり以下の<図8(b)>の逆行態が示すように、心的注意(感情)が向けられるだけでは話者はその主語の心理的感情を知ることはできず、知覚することもできないので、逆行構文は容認されない。一方、受動態構文であれば、<図8(c)>が示すように、話者は心理的な影響を蒙っていることを表す。話者が不利益を被ったり不愉快に感じるという結果(話者の受ける心理的影響)があってはじめて、自分が「うらみ」「にくみ」の対象になっていると断定できる証拠になる。話者が被る心理的影響を<図8(c)>ではGからの実線矢印で記した。「主語指示対象者が自分をうらんだ/にくんだ」と判断できるための根拠(実害など)もなく、「うらむ」「にくむ」という目に見えない心的注意のプロセスの存在を認識してそれを前景化するのには極めて不自然なので、「てくる」逆行態構文(44b)は、容認されない。

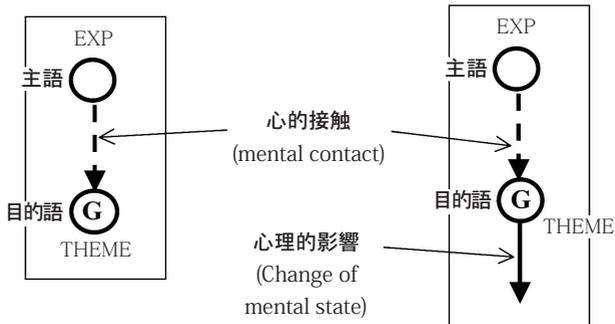
<図8> 心理述語動詞が表す事態、その逆行態と受動態

(a) 能動態: 太郎がわたしをうらんだ。



(b) 逆行態: *太郎がうらんできた。

(c) 受動態: 太郎にうらまれた。



(44b)から、坂原(1994)の主張に反して、すべての「受害」事態を「てくる」構文で表すことができるわけではない、といえる。さらに「受益」についても、

(45) a. *先生がほめてきた。

b. 先生にほめられた。

c. いつも小言ばかり言っている先生が、いきなりほめてきて、びっくりした。

「ほめる」という肯定的な行為が話者に向けられても逆行態を使った(45a)は不自然であり、「ほめられて嬉しい」という話者の心理結果状態をも含意する受動態(45b)は自然である。ところが、(45c)のように文脈によって「ほめる」という伝達行為に焦点をあて、その意外性を強調し、ほめられた結果の嬉しさを背景化すると容認性が上がる。

上の(44)、(45)から、受益や受害といった被動作者(話者)への影響を前景化

して言語化することが「てくる」という構文形式を選択する要因ではないと結論できる。「てくる」逆行態構文の概念構造にとって重要なのは、受益や受害といった影響性ではなく、以下の二点である。

- 1) <<行為の方向性>>制約: ある行為が話者にめがけて行われていること
- 2) <<知覚可能性>>制約: その行為を話者がその現場で知覚していること
(物の移動や、メッセージの伝達行為の場合は、(とりあえず)物を受け取るなりメッセージを受信するなりしていること)

この二つの制約は移動動詞「来る」のプロトタイプから継承している。「バスがきた」という場合、話者の領域にバスが移動し、話者にそのバスの前方が見えたとき、話者は「バスが来た」といえる。これは話者自身の立ち位地からの「見え」を表している。同様に逆行態構文の「てくる」の場合も話者(概念主体)は自分へ向けられた動作主による行為を知覚することができなくてはならない。この<<知覚可能性>>制約は以下(46)に明らかである。

- (46) a. ??ぐっすり寝ている私に、太郎が毛布を投げてきた。
- b. ぐっすり寝ている私に、太郎が毛布を投げた。

(46a)は逆行態で、太郎が毛布をなげるという行為を話者の視点から見ている表現であるが、実際には話者は眠っているため、毛布を投げられたことを見たり気づいたりすることができないので、不自然である¹⁰⁾。一方(46b)では、話者は自分自身を「私」という代名詞で客体化し、話者は言語主体としてその事態参与者である「私」を客観視している。太郎がその客体化された「私」に毛布を投げたという出来事をまるで他人事のように想起しており、その場面での「私」は毛布を投げられたことに気づいていなくても(46b)は問題なく言える。逆行態「てくる」は、話者がその場面の位置から当該の行為を「知覚」しており、そうした自分への行為の「見え」を言語化する。このことから行為の結果ではなく行為のプロセスを前景化する機能がこの構文にあることも自然に説明される。自己に向けられた行為の「見え」という知覚であるから、その行為は未遂に終わる場合もある。しかし「にくむ」のように視覚的に把握しにくい事態では、他の証拠となる出来事の発生およびその結果話者が被った心理的影響によって動作主による「にくむ」行為を知覚するので、「にくむ」行為を知覚した時にはもう既に「にくまれた」ことになる。

6. 2. 相互対立、交渉関係フレーム

「てくる」逆行態は文脈によって容認度が変わる。以下(47a)の不自然さが、

(47b)では文脈情報の追加によって消える。この文脈は、動作主と話者の間に喧嘩や口論が生じたことを想起させる。つまり(48)の例のように動作主と話者の間に喧嘩や交渉、試合、ゲームといった相互対立や取引関係のフレームがある場合に、「てくる」逆行態の容認度が上がるようである。これは動作主と話者の相互のやり取りがなされるようなより広い談話文脈の中に位置づけることによって、主動詞で表される行為が動作主から話者に対して「向けられた」ものであるという解釈が、より自然になるためであろう。

(47)a. ?*あいつが腹を立ててきた。

b. あいつが最初に腹を立ててきたんだ。おれが悪いんじゃない。

(山田2004)

(48)a. フォーメーションを変えてきた。<サッカー> (Google 検索)

b. 太郎はそこにふを打ってきた。<将棋> (Matsumoto 1996)

c. 会社が給料を減らしてきた。<労使関係> (澤田 2008)

7. おわりに

本稿では、日本語の移動動詞「来る」が文文化した「てくる」構文のうち逆行態の用法を中心に、「来る」との意味的関連性、および文文化連鎖における周辺的な用法とのつながりを考察した。さらに類似する概念構造を持つ受動態構文と比較することで逆行態構文の概念特徴を明らかにした。

「てくる」逆行態の制約としては、主動詞が表す行為を概念化主体が知覚していなければならないことがあげられる。また、逆行態は行為のプロセス側面に焦点があるために動作主が主語位置に残るが、受動態は行為の結果に焦点があるために被動作者が主語位置に生じることを示した。

「てくる」は逆行態のほかにも、始動アスペクトや継続アスペクトを表す用法を持つ。こうした「てくる」構文が表す文法的多義性や多義間の関連性の詳細な記述および説明については、今後の課題としたい。

注： *本稿は、第10回国際認知言語学会(スペイン、平成19年7月)における口頭発表を修正・加筆したものである。

- 1) 山田(2004)では、「電話をかけてくる」を主体位置変化動詞とみなし、動作主の位置が抽象的に移動すると分類しているが、むしろ、Reddy(1979)の「導管のメタファー(conduit metaphor)」に基づき、伝達されるメッセージを具体的移動物と捉えて、「母がみかんを送ってきた(山田 2004:41)」のような対象移動動詞として分析したほうが妥当であると思われる。

- 2) Langacker(1985:115)は、‘come’が直示性の高いことを、以下のような例文で示している。

She came to the window.

この場合、話者あるいは話者と視点を共有する誰かが窓(the window)の所に居て、主語(she)がやってくるのを待っているような状況を強く示唆する。

- 3) Leder(1990)はこの背景化され言語表現の対象からはずされる身体を“receding body”とよび、Gibbs(2005)は“corporeal disappearance”と呼ぶ。
- 4) 上原(2006)は、Langackerの認知文法に正式にしたがった図式ではないインフォーマルな「上原式」図として、概念化主体からの「見え」を「来る」の概念構造として示している。
- 5) 文法化連鎖において、2つの用法のあいだで解釈の曖昧性(ambiguity)が生じるという例は、以下のsinceの例に見られる。このsinceは「～以来」という時間の解釈と、「～ので」という理由の解釈の両方が可能である。

Since Susan left him, John has been very miserable.

(Hopper and Traugott 1993:74)

- 6) このことは、話題性(topicality)あるいは話題(topic)という概念を、実際の言語現象を説明するための道具的概念として、明確に定義することの難しさを示している。概念化主体は主体であることだけですでに言語活動全体から見れば話題性が高くなる要因となる。一方動作主であることは概念化対象のうち最も能動的で最初に注目される参与者であることから話題性が高くなる。このように客観的事態の中での話題性(参与者)と、言語活動全体の中での重要性(とくに言語主体という意識の在り処として)という二つの概念領域での異なる「話題性」の存在のしかたは、つまり、知覚(概念化)対象に関するか知覚(概念化)主体に関するかの二区分と対応する。その二区分の異領域の情報が両方とも言語表現に反映される際に、概念化対象(客体)に属する情報と概念化主体(主体)に属する情報を文法理論の中で明確に記述し、それがいわゆる話題(topic)という概念とどう結びつくのかを明らかにする必要がある。
- 7) Langacker(1991:305-313)においては、主語を特徴づけるものとして「注意の焦点」という概念を仮に提案するものの、それをより抽象的な「図と地の分化」に還元して、主語を「言語化される節の中の図(the status of figure within the clausal profile)」「関係の中の図(relational figure)」として説明しようとする。この論法でいけば、受動態の主語となる話者の方が、逆行態の参照点となる話者よりも際立ちが高い、という結論に至るが、「てくる」逆行態が含意する話者の関与や直示性という意味を適切に説明するには不十分である。
- 8) 動作主のいない意図的でない行為が「てくる」構文で表されると、それは逆行態用法としては解釈されない。

- a. 太郎がいきなり倒れてきた(移動の方向)
 - b. 壁がくずれてきた。(始動アスペクト、移動の方向)
- 9) 達成アスペクトの動詞でも、結果状態を含意する程度は、動詞ごとに異なるようである。以下の容認度の違いに注目されたい。
- a. 燃やしたけれど、燃えなかった。
 - b. ??盗んだけれど、盗めなかった。
 - c. ??殺したけれど、死ななかった。
- 10) 査読者より、「ぐっすり寝ている私に、太郎が毛布をなげてきた。それで目が覚めた」であれば容認可であろうという指摘を受けた。この例は<知覚可能性>の制約に対する反証ではなく、むしろこの制約を支持する例といえる。「目が覚めた」のは、毛布が投げられたことを「知覚」したからである。

主要参考文献：

- Dahlstrom, Amy. 1991. *Plains Cree Morphosyntax*. New York, Garland Pub.
- Gibbs, Raymond W. 2005. *Embodiment and Cognitive Science*. Cambridge University Press.
- Givón, Talmy. 2001. *Syntax*, Vol.2. John Benjamins.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge University Press.
- Ikegami, Yoshihiko. 2006. Indices of a ‘Subjectivity-prominent’ Language. *Annual Review of Cognitive Linguistics*. 3. 132-164.
- Langacker, Ronald W. 1985. Observations and speculations on subjectivity. In *Iconicity in Syntax*, ed. by John Haiman. 109-150.
- Langacker, Ronald W. 1990. Subjectification. *Cognitive Linguistics*. 1. 5-38.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundation of Cognitive Grammar*, Vol.2. Stanford University Press.
- Leder, Drew. 1990. *The Absent Body*. The University of Chicago Press.
- Matsumoto, Yo. 1996. *Complex Predicates in Japanese: A Syntactic and Semantic Study of the Notion ‘Word’*. CSLI Publications/Kuroshio Publishers.
- Payne, Doris. 1993. The Tupi-Guarani inverse. In *Voice: Form and Function*, ed. by Barbara Fox and Paul Hopper, 313-340.
- Reddy, Michael. 1979. The Conduit Metaphor. In A. Ortony, ed., *Metaphor and Thought*, 284-324.
- Shibatani, Masayoshi. 2003. Directional verbs in Japanese. In *Motion, Direction, and Location in Language: In Honor of Zygmunt Frajzngier*, ed. by Erin Shay, and Uwe Seibert, 259-285. John Benjamins.

- Shibatani, Masayoshi. 2006. On the conceptual framework for voice phenomena. *Linguistics* 44(2): 217-269.
- 古賀裕章 2008 「てくる」のヴォイスに関連する機能 森雄一・米山三明・山田進・西村義樹(編)『ことばのダイナミズム』くろしお出版
- 菊地敦子 2004 「COMEとクルの意味拡張における到達点の違い」『対照言語学の新展開』ひつじ書房 27-46
- 坂原茂 1995 「複合動詞Vて来る」『Language, Information, and Text』2:100-143.
- 澤田淳 2008 「日本語の移動動詞の意味変化と継続アспект」日本言語学会第136回大会(学習院大学)
- 山田敏弘 2004 『日本語のベネファクティブ』明治書院